回路

KAIRO

黒沢清

黒沢清 回路

KIYOSHI KUROSAWA

徳間書店

黒沢 清（くろさわ・きよし）
映画監督。『CURE』『カリスマ』『大いなる幻影』で世界的に高い評価を得て、映画作家としての地位を不動のものとした。本書と同名の映画『回路』は、完成前からヨーロッパをはじめ数十カ国から公開のオファーを受けている。自身で書下した小説『CURE』（徳間文庫刊）は書評等で絶賛され、小説家としても並々ならぬ力量を示した。

回　路

第一刷 —— 2001年1月31日

著　者 —— 黒沢　清
発行者 —— 牧田謙吾
発行所 —— 株式会社徳間書店
東京都港区東新橋1－1－16
郵便番号105-8055
電話（03）3573-0111（代表）
振替00140-0-44392
（編集担当）磯谷　励
印　刷 —— 長苗印刷㈱
カバー刷 —— 近代美術㈱
製　本 —— 大口製本印刷㈱

©Kiyoshi Kurosawa 2001 Printed in Japan
乱丁・落丁はおとりかえ致します。

ISBN4-19-861297-8

回
路

装幀／パワーハウス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

工藤ミチはどこにでもいるごく普通の若者だった。女ではあったが、それで何か抑圧を受けたという経験も知らず、ただいくつかの社会のルールに漠然と従い、同時にそういう自分に対して本能的な反発を感じながらも、時代に寄り添って何となくこれまでやってきた。将来のことはよくわからぬが、かと言って振り返ってみるほどのさしたる過去もなく、「お前はいったい何がやりたいのか」とよく大人たちは問うが、たいしたことをまだ何もやってみたことがない上に、その結果がどうなるのかも知らされていない者にとって、かかる質問はおよそナンセンスにしか聞こえなかった。「自分が何をやりたいのかよくわからない」というのがこの年齢の最大の特徴であることを、大人たちはつい忘れてしまうのである。

が、一方で彼女はもう子供ではなかった。本人が望もうが望むまいが、社会の制度の中では立派な大人として扱われ、ある日を境に急に周囲から社会人と呼ばれる。これにだいたいの者が戸惑う。子供と大人の中間地帯に明らかに若者という人生の一時期があって、それはみんな

が等しく経験するはずなのに、制度はそんなものは存在しないと言い張るのである。このことに関して大人たちは「若いというのは精神の現象なのであって、肉体的年齢は関係がない。だから実際、老けきった十代もいれば若々しい中年もいる」と言う。一方、当の若者たちは「社会の何がしかの矛盾がそこに集結した年齢、運命とあきらめて耐えるほかない、人生の中の過酷な数年間、それが若者だ」と言うだろう。工藤ミチは現在、別になろうとしてなったわけではないそういった若者という運命のただ中にいた。

とりあえず運命に従うことしか生きる方法を見つけ得なかった人間が、肉体や精神に根ざした強固な人生を生きる者には耐え難い事件を耐えて生き延びることがあり、出来事に翻弄され流れに身を任せた者が、結果、自らの人生のテーマを貫こうとして力尽きた者たちには決して垣間見ることのできなかった〝先の世界〟に到達してしまうということが時としてある。その詳細はこれから語られる物語のひとつの主軸となるだろう。それゆえ、工藤ミチは主人公のひとりに選ばれた。

ところで、彼女は既に学生ではなかったが、しかしまっとうな社会人たる大人の仲間入りを果たすことにもまだちゅうちょを憶え、現在アルバイトという身分を選択していた。仕事場には似たような状況にある同年代の者たちがいた。彼らのことをミチは、男女を問わず友達と呼んだ。クラスメイトではない、同僚でもない、かと言って趣味嗜好を同じくする仲間でもない、

たまたま同じ場に居合わせた、たまたま同じような年齢の連中、確かにそれは友達としか言いようのない者たちであった。ぼんやりした友情が形成する閉じられた関係、ミチはことのほかそれを大切だと思い、家族から離れ、少なくとも子供ではなくなった自分が今生きているのはここなのだ、と強く感じていた。裏を返せば、彼女が認識する社会とは当初その程度のものであったとも言える。しかし、その程度であったからこそ、今後彼女の身に降りかかることになる異変、それをもって人類の歴史を前と後に二分したと言っても過言ではない未曾有の一大騒動を通過したあとになっても、彼女はその生まれ持った気持ちのいい性格を変えずにいられたのだ。

つまり彼女は、驚嘆すべき数々の出来事を前にして、自身の人間性が崩壊しない程度には大人であり、また、世界の激変が、思い描いていた将来の幸せにどれほどの大打撃を与えたか、今ひとつぴんとこない程度に子供でもあった。実際、その出来事はいっぱしの社会人であればあるほど、とうてい耐えることのできない性質のものだった。そして、多くの者が滅び去った。が、彼女はこの運命に耐え、何とか持ちこたえたのだ。この時ちなみに彼女は二十一歳であった。

2

受話器を持つ佐々野順子の手がその頬に必要以上に強く押し当てられているのを、ミチは見逃さなかった。電話の向こうに聞き耳を立てながら、明らかに順子は身をこわばらせている。何か漠とした悪い予感とでも言うべきものにとらわれているのだろう。彼女は時折そういう神経過敏なところを見せる。それが陽気に発露されれば、心地よい興奮を伴って周囲を巻き込んでいくリーダーの資質が備わったキャラクターだとも言えるのだが、思い込みが余りに強すぎる場合、その強情さにミチもほとほと手を焼くといったことがしばしばあった。しかし、今回は違っていた。なぜなら、この件については、ここのところミチもずっと気になっており、そろそろ何か最悪の事態を想定してもいいころあいなのではないかと思い始めていたからだった。

今順子が掛けている電話の先は、田口耕平という名前の仕事場の同僚であって、ミチの言葉で言えば友達のひとりであった。しかし、ここ一週間、この田口とさっぱり連絡が取れないでいる。熱帯産観葉植物の通信販売を生業（なりわい）とするこの小さな会社で、田口はもっぱら顧客データを管理する仕事を任されていた。もちろん正社員ではない。そういう立場の者はここにはひとりもおらず、従業員全員が経営者の気まぐれで採用されたアルバイトの若者ばかりであった。田口もただパソコンに通じているという理由だけで、顧客データ管理というひょっとすると利

潤追求のかなめかもしれない役割を振り当てられていた。上昇志向の強い会社なら、このような素人がそんな立場につくのは余りに杜撰と言えただろう。しかし、この経営者はそういう野心と無縁な人物で、ほとんど趣味の世界に生きる者であった。ミチも、別に熱帯植物に興味があってここを志願したわけではない。ただ割と自由に時間が使えること、時給が悪くはないこと、つまり気楽そうなことがその最大の理由だった。おそらくみんなそうだ。だから、田口もよく「家でパソコン打ってくる」と称して二日も三日も出社しないことが今までも何度かあり、その実際はミチにはよくわからないにしても、別段気にとめたことはなかった。そういう時、田口の方にも特に悪意や後ろめたさがありそうにも見えず、だいいちミチ自身だって一時間も二時間も遅刻してくることが多々あるといった塩梅で、要するにそういった生ぬるい環境の中で、それでも日々、贅沢はできないにしろたいした苦労も感じることなく生きていければ、それは全然恥ずべきことじゃないじゃないか、という雰囲気がこの会社にはあった。

だが、今回は少々違っていた。明らかに異常事態であるとミチはうすうす感じていた。何度呼び出してみても、田口の携帯はいつも電源が切れたままだし、自宅は留守電になっている。もちろん、向こうからの連絡はいっさいない。そうなってから一週間が経とうとしていたわけであるが、ミチがはっきり変だと直感したのは昨日のことであった。いよいよ思い余って、昨日、ミチは田口の実家に電話を掛けてみた。その番号を調べ出すために、彼がここに採用された時の履歴書を棚の奥から引っぱり出すのに少々骨が折れたが、しかしミチは自力でそれを見

つけ、とにかく電話した。結果は、誰も出なかった。肉親がたまたま不在であったのか、それとも田口が嘘の番号を書いたのか、それはわからない。しかし、むなしく鳴り続ける呼び出し音を聞きながら、わけもなくぞっと寒気が走ったあの嫌な感覚をミチははっきりと憶えている。理由はないが、あれが決定的だった。田口の身に何かが起こったのではないだろうか。

と、順子がそっと受話器を置くのが見えた。

「田口くん、やっぱり出ない？」とミチは聞いた。

「うん」順子の返事は曖昧だった。「でも、留守電じゃなかった。ずっと呼び出し音が鳴ってるの。それって変だよね」

あの昨日ぞっとした感覚、多分あれを順子も味わったのだ。

「だって、今朝は留守電になってたんだよ。でも、今は普通の呼び出し音。誰かが留守電のスイッチ切ったんだ」

ミチにとって、順子のこの理詰めの発想はやや意外であったが、確かに変ではあった。しかし、その誰かというのは誰のことか？

「田口くん、かな」順子は呟いた。「じゃあ家にいるわけだよね。どうして出ないんだろ。それとも、別な誰かがいるのかな、親とか、恋人とか」

もし田口の家にそういう人がいたとして、もちろん電話に誰も出ない理由にはならない。この場合、田口は、何か一定の時間が経つと留守番電話が自動的に解除されるような装置を取り

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

つけていたと考える方が妥当かもしれない。何のためかは知らないが、パソコン好きの田口ならそういうこともやるだろう。が、仮にそうだとしても、それで田口の不在の謎が解けたわけではなかった。

「いやだ」不意に順子がそう口走るのが聞こえた。

「やっぱり何か起こったんだ」

何かとはいったい何？　ミチは思わずそう聞こうとした。しかし、順子は続けた。

「絶対誰かいる。で、ベルが鳴ってるのわかってて出ないんだ。どうして？　田口くんの部屋で何やってんの？　わかんないけど、今すごく嫌な感じがした。誰かが電話の向こうでじっと息をひそめてるみたいな」

「それって、どういうこと？」

「知らない」

順子は、この不吉な会話をこれ以上続ける気をなくしたようだ。電話から離れ、温室の脇のダンボールに山積みされているエア・プラントをいじり始めた。これをより分け、価格別に分類して小さな化粧箱に梱包する、そういった作業が彼女たちの主な仕事であった。急に無責任を決め込んだ順子のこの態度に、ミチは少々苛立ちを覚えた。事態は今や切迫しているのだ。いくら不吉か知らないが、友達をこのまま見捨てておいていいわけがない。

「警察に連絡してみようか」

「でも、何て言うの？」順子は素早くそう返した。「嫌な感じするんですとはまさか言えないよね？　電話の向こうに誰かいるんですとも言えないし」

その通りだ。いくら友達と言っても、田口との関係はこの会社の中と帰りがけのお茶の席だけのものであって、それ以上ではなく、だからこそ気楽な友達のひとりと言えたのであるが、田口がそれ以外のプライベートな時間を誰とどう過ごしているかはミチの与り知らぬところで、今警察などというぶっそうなものを発動させてそのプライベートにずかずかと踏み込むのはいかがなものか。ミチは逡巡した。ここはひとつ順子と同じ無責任を決め込もうかとも考えた。もう少しでそう決めるところだった。しかしそうはしなかった。

「私、もう一回電話してみるね」そう言ってミチは受話器を取り、田口に電話した。

呼び出し音が聞こえてきた。留守電に切り替わる気配はない。と言って、順子が主張するように、電話の向こうで誰かが息をひそめている気配も感じられない。ただのそっけない電子音が単調に繰り返されるばかりである。ミチは切ろうとした。が、次の瞬間、ビクッと身体が痙攣し息を詰まらせた。出たのだ、誰かが。あまりに予想外の出来事に、ミチはすっかり動転してしまった。いやそれ以上に、この時のミチには、すぐ耳元で無愛想に鳴っている電子音は実は彼方の世界を強制的に呼び起こすコールであるという、普段なら馬鹿みたいな当たり前の状況が、隔たった空間と空間とが物理法則を無視して悪意の接触を試みる、仰天すべき異常事態に思われたのだ。ほんの一秒か二秒かの後、ぷつりと電話は切れた。同時にあちらの気配も消

え去った。「田口くん？」と確認する間もなかったし、またそんなことは思いつきもしなかった。ミチはただ絶句していた。

「なあ、田口まだ捕まんないの？」という声がした。矢部俊夫だった。矢部もまた、ミチや順子と同じ二十一歳であったが、いくぶん落ち着いて見えた。それは彼の外見からくるものと言うより、何となくいつも人をちゃかし、万事にアイロニカルたらんとする彼の態度からきている。隣室から入ってくるなり、彼は来客用のソファにどっかりと腰を下ろし、「ふー」と大きなため息をひとつついてから、やや気の抜けたような口調で近くにいた順子にもう一度語りかけた。

「顧客リスト作るのに、普通一週間もかからないよな。絶対さぼってんだよ、あいつ。誰も文句言わないからな、この会社。だからみんなつけ上がるんだよ。俺もつけ上がってるけど。でもさ、そろそろ誰か怒った方がいいんじゃないの？」

「私知らない」順子はつっけんどんだった。

「うわ、どうしてそんなに冷たいの？　ひょっとしてあいつ、失恋して鬱病かなんかになってるのかもしれないぜ。今ごろ泣いてんじゃないかな、誰も助けに来てくれなくて。どっかの森の中で首吊ろうとしてたりしてさ。あるな俺にも、そういうこと。どうせいつか死ぬんだし、それならいっそ今がいいって思うこと。楽なんだってよ、首吊りって」

「私、行ってくる、田口くんち」出し抜けにミチはそう口にした。もうとっくに心は決まって

いた。
「やめなよ」と順子が叫んだ。
「え？」と矢部が間抜けな声を上げた。
「大丈夫。田口くん、きっと何か事情があって家に閉じこもってるんじゃないかな。私そう思う。仮に田口くんがいなくても、顧客リストのフロッピーはちゃんと持って帰るから」
「でも、どうやって部屋に入るの？」
「田口くんちってアパートでしょ、きっと近くに大家さんがいるんじゃないかな。最悪そこで鍵借りる」
「行ったことあるの？　田口んとこ」と矢部が怪訝そうに聞いた。
「ないよ、そんなの」
「確か八王子の先だろ？　遠いぜ」
「うん。でも帰る方向いっしょだし、それに、どうせ私今日は暇だから。八王子の先か。いいな、いっぺん行ってみたかったんだ」
　ミチは、デスクの住所録から田口の部分を手帳にさっと書き写し、元気よく会社をあとにした。彼女は、どちらかと言うと何事にも慎重な性格であったが、時として、その心の奥底に隠された自分でも意識しない一直線に突き進む面を垣間見せることがある。だから、いったんこうと決めてからのミチの行動は素早かった。残された順子と矢部は、ややあっけにとられてミ

チを見送った。この時がちょうど午後四時。八王子に着くのは五時近くになる。夏だとは言え、その頃には日も傾きはじめるだろう。ここ渋谷区代々木のオフィスからはるか先、遠く武蔵野の大地を隔てた山間部で工藤ミチを待ちうけているのは暗い、果てしない宵闇だった。

何かのまえぶれであるかのように、その闇は尋常ならざる濃度をもってじっとりと垂れ込めつつあった。ミチは今一直線にそれに向かっている。そして、まだ何も知らない。

3

一方……彼らは存在していた。今のこの現実という時空間に住まう者にとってはまったく未知の領域に、うごめき、ひしめき合いながら、しかしそのひとつひとつは他とまったく切り離されにっちもさっちもいかない絶望と安定とまどろみに似た状態のまま、確かにそこにいた。もちろん、我々が彼らの存在をまったき客観性の下に認識することは原理的に不可能であったし、また彼らにしても、生まれては消えていくつかの間の存在ひとつひとつを取り上げて、これに何か作用を及ぼそうなどと考えてもいなかった。我々は彼らを絶対に見ることができず、彼らは彼らで限りある肉体にはとんと関心がない、そういう安定した時間だけがもうかれこれ何万年、いや何十万年と過ぎ去っていた。

ある意味で、彼らは極端に保守的であり運命論者であったとも言える。それに対して我々は、

どちらかというと急進的で冒険主義的なところがある。だから時おり我々の中に、彼らの存在を夢想し、またこれを確かに目撃したと主張する者も出てくる。が、よくよく追跡調査してみれば、いずれの場合も結局それを信じるか信じないかといった極めて情緒的なレベルの話に落ち着くのが常であって、時々の権力者や野心家たちがそういった情緒を利用することはあったとしても、それで彼らの存在が明らかとなることは一度もなかった。元々、我々の言葉を使って彼らのことを冷静に思考したり正しく記述したりすることは不可能なのであるから、時を経るにしたがって、だんだん人々も飽きてきたのか、今ではもう真面目にそれを試みようとする者もすっかりいなくなっている。つまり、はっきり言って彼らとは、我々にとってどうでもいい存在なのであり、同時に、我々とは、彼らにとってまったくもって取るに足らぬ事柄でしかなかったというわけだ。

しかし、それでもやはり彼らは存在していた。そして、見ようと思えば、我々のことがいつでもはっきり見えた。目という器官を通してではなく、想像もつかないやり方で、ではあるが。さらに、我々にとって彼らは未知であるが、彼らにとって我々は当然ながら既知であった。我々には知るよしもないことであるが、本来彼らは、我々の動向をいかようにも細かく認識でき、いかようにも影響力を行使できる立場にあったのだ。これが、実は決定的なことであった。つまり、限りある肉体を持つ我々は、それを夢想する以外、まったく彼らに手出しする手段がなかったわけだが、彼らは我々に何でもできた。しようと思い立ちさえすれば、いついかなる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c